



星陵セミナーの思い出

昨日の星陵セミナーでは、私は本部の係だったので、直接セミナーに参加することはなかったのだが、逆に、セミナーを終えた先輩方に謝意を表しながらお迎えしたりしたので、教室からお戻りになった先輩方の表情を拝見したりすることができた。どの先輩方も笑顔をたたえて満足そうな様子で会議室に戻ってこられたので、よいセミナーになったのではないかと想像されたが、実際はどうだったのだろうか？ プレゼン用のPCの具合が悪くなったりしていないかといったことを確認するために、何回か廊下から教室の様子を覗かせてもらったが、私が覗いた時には居眠りをしている諸君もおらず、イイ雰囲気での講義が展開していた。

今回は講義に参加できなかったが、過去に英語翻訳に関わるセミナーや、心理学、TVドキュメンタリーの講座に参加させていただいたことがある。心理学の講座は今回の先輩とは異なる方だったが、TVの講座は今回と同じ坂上達夫先輩で、興味深くお話を伺った。ただ、一番面白かった印象があるのは、英語翻訳の講座で、講師は、当時東大教授だった柴田元幸先輩であった。

柴田元幸さんは、ネットで調べればすぐに名前が出て来る。Wikiの記事を引用しよう。

＊

日本のアメリカ文学研究者、翻訳家。東京大学名誉教授。東京都大田区出身。

ポール・オースター、チャールズ・ブコウスキー、ステイヴ・エリクソン、ステイヴン・ミルハウザー、リチャード・パワーズなど現代アメリカ文学、特にポストモダン文学の翻訳を数多く行っている。彼の翻訳した本は注目を

集めるため、レベッカ・ブラウンなどは本国アメリカよりも日本での方が人気が高い。

1995年、ポール・オースター『ムーン・パレス』でBABEL国際翻訳大賞日本翻訳大賞（主催：「翻訳の世界」（バベル・プレス））を受賞。2005年、『アメリカン・ナルシス』（東京大学出版会）で、サントリー学芸賞を受賞。2006年、初の小説集『バレンタイン』を新書館より発行。2007年には現代文芸論研究室を沼野充義とともに創設。同2007年、『ふつうに学校に行くふつうの日』で第11回日本絵本賞翻訳絵本賞を受賞。2010年、『メイスン&ディクソン』（上・下）で第47回日本翻訳文化賞を受賞。2017年、早稲田大学坪内逍遙大賞受賞。また自身も文学や翻訳を題材にしたエッセイを執筆しており、『生半可な学者』で1992年、講談社エッセイ賞を受賞している。歌手の小沢健二は柴田ゼミ出身。弟子として都甲幸治・小山太一らがいる。

自身の責任編集による文芸雑誌『モンキービジネス』（ヴィレッジブックス、2008年 - 2011年）、『MONKEY』（スイッチ・パブリッシング、2013年 - ）を創刊し、現代アメリカ文学の紹介に務めている。

＊

セミナーでは、柴田先輩が日本ではまだ翻訳されていないポール・オースターの小説の一節（もちろん英語）を持参されて、それをみんなで翻訳して批評し合うという作業に取り組んだ。はっきり思い出せないのだが、単なる「日本語訳」ではなく、小説を「翻訳する」とはどういうことなのかという話だったように記憶している。具体的な作品が目の前にあるだけに、説得力があり楽しかった。